

史料の選択および歴史叙述に、すでに「真実」という主観性が含まれる関係上、ランケ史学が探究する客観性や実証性がどこまで実現されているのかという批判である。確かに、史料分析とその解釈における実証性は歴史学においては守り通さなければならないことであろう。そのための史料批判が必要であり続けるはずだ。しかし、このような歴史学以外の学術分野からの批判は、人間の探究にも責任をもつべきであるという、歴史学の在り方を反映した妥当な見解といえる。従来、歴史家自身が、過去の歴史は、現在を生きるための史眼や見解を述べているものであり、記述全体が当然、われわれの置かれた環境に立脚して、未来への指針を知るべく、先人の発想や過去の出来事からの教訓を学び取ろうとする行為であると主張してきた。その反面、歴史家は、過去と現在、あるいは未来をつなぐ「叙述」を詳細に行なわなかったという問題がある。それは歴史学の目指す道でないと、山岸博士が真摯に語られていたことが印象的である。しかし、おそらく山岸博士自身、人間探究や社会的責任ということも重んじ、私と同じ葛藤をお持ちであったのではなかろうか。本書では、21世紀初頭の過渡期における時代の要求に応じて、敢えてそのような先学の教えを少しだけ逸脱し、自分なりの新しい歴史観の形成に努めた。記述内容に、現代社会を扱った2章分（第8章、第9章）を追加し、従来の歴史学の枠組みを越境しつつ、他の領域（文学・文化批評、語り、映画、現代地域研究など）の研究成果もふまえた。この作業を通じ、現代歴史学への展望を示したつもりである。

米国史で重視されている3Rの一つである、「アラモを忘れるな（Remember the Alamo!）」を主題として扱ったわが国初の学術書である本書の構成は、以下の通りである。識者の反応に耳

を傾け、自らの方法論を構築してゆきたい。

まえがき

第1章 アラモ砦事件前史

第2章 メキシコからみたテキサス暴動の制
圧の意義—サンタアナのテキサス進攻

第3章 アラモ砦事件と籠城者の性格をめぐ
る論争

第4章 アラモ砦陥落とサンタアナの暴虐性
をめぐって

第5章 「アラモ砦」事件をめぐる史実と伝説
の相克—生き証人による語りの伝承におけ
る問題を中心に

第6章 もう一つのアラモ—ゴリアッド虐殺
事件

第7章 サンハシントの戦いとテキサス独立

第8章 映画『アラモの殉教者』をめぐる文化
批評

第9章 現代テキサスの表象としての「アラ
モ」と「カウボーイ」—歴史文化の観光化と
政治化

あとがき

関係略年表

史料

註

参考文献

索引



『世界地誌 10：中部アメリカ』（朝倉書店、2018年） ㊦ 獨協大学・浦部浩之

本書は、朝倉書店から刊行されている「世界地誌シリーズ」の第10巻として編まれたものである。2011年4月に刊行が始まったこのシリーズの1巻から9巻までのラインナップは「日本」、「中国」、「EU」、「アメリカ」、「インド」、「ブラジル」、「東南アジア・オセアニア」、「アフ

リカ」、「ロシア」である。第10巻は2018年3月の日本地理学会春季学術大会に合わせて刊行されることになっていたが、何とか間に合い、まずは安堵している。

最初に、この本の概要を紹介しておきたい。編者は石井久生氏（共立女子大学）と私である。全10章で構成されており、石井氏と私が2章ずつを、他の6人がそれぞれ1章を執筆した。各章のタイトルと執筆者は次のとおりである。なお、石井氏の第1章と私の第10章は、本全体としての序章と終章の役割も兼ねている。

- 1 中部アメリカ地誌へのアプローチ—地域概念と地域区分（石井久生）
- 2 自然環境と災害—自然災害への脆弱性（浦部浩之）
- 3 民族と文化の混淆—征服から現代まで（井上幸孝）
- 4 多様な農業—企業的農業から零細農まで（新木秀和）
- 5 都市化する中部アメリカ—急速な都市化と不均衡な集中（石井久生）
- 6 ヒトと資本の移動—国内・国際人口移動からレメッサ（郷里送金）まで（松井謙一郎）
- 7 貧困と社会格差—データから確認する厳しさ（久松佳彰）
- 8 中部アメリカの地政学—列強・大国に翻弄される国々（山岡加奈子）
- 9 多様なツーリズム—マスツーリズムから「新しい観光」まで（杓谷茂樹）
- 10 世界の中の中部アメリカ—中部アメリカの国際関係と日本（浦部浩之）

本稿では、せっかくの機会なので、本書の内容よりも本書刊行の経緯や編集を通じて感じた

ことなどを中心に記させて頂きたい。なお、以下はもっぱら私の個人的な見解であり、もう一人の編者の石井氏が感じられていることとは一致していない可能性もある。そのことをあらかじめお断りしておきたい。

本書の企画編集のお話は最初、地理学（文化地理学、地誌学、アメリカ地誌）がご専門の矢ヶ崎典隆先生（日本大学）から頂いた。少し記憶が曖昧であるが、2014年の夏か秋くらいのことだったと思う。矢ヶ崎先生は本シリーズの第1弾として刊行された4冊のうちの1冊「アメリカ」の編集を担当されたのを含め、本シリーズ全体の編集に重要な役割を果たされており、お話は、第3弾の3冊（第8～10巻）のうちの1冊を「中部アメリカ」としたい、その編集を、内容や執筆者の人選を含め、石井氏と私に任せたいということであった。

この打診があったとき、私には、お引き受けする以外の選択肢はなかった。じつは矢ヶ崎先生は、私が学部（筑波大学比較文化学類）の3年生だったときのクラス担任であられた。また、私が生まれて初めて海外旅行をしたのはその大学3年の夏休みのことであったが、同級生とともに、先生が研究出張でご滞在中であったブラジル・サンパウロを訪ね、リベルダーヂ地区にある韓国料理店でお食事をたらふくご馳走になった思い出もある。矢ヶ崎先生は翌年4月、別の大学に転出され、私のほうも、学部生のときに属していた地理学のコースを離れて修士課程ではエリアスタディーズに進み、関心は政治や国際関係に向いていった。他の先生からのお勧めもあって進学直後に日本地理学会の会員にはなったものの、最初から幽霊会員状態であり、地理学とは疎遠になるばかりであった。ところが、こんな私でありながら、矢ヶ崎先生は地理学者が顔を揃える科学研究のグループ（石井氏もそ

のメンバー)に私をお招きくださり(基盤 A、2011~14 年度、世界の博物館アメリカ移民と基層文化の再検討によるグローバル地誌の構築一)、それがきっかけで私も日本地理学会の大会に顔を出すようになった。とにかく、こうした私の曲折をまったく気にせず温かく接して下さる矢ヶ崎先生からのご依頼であったので、私は、能力面での不安は大きかったものの、お断りするわけにはいかなかったのである。なお、実務的な面で懸念したのは、私が直後に 1 年間(2015 年 3 月~16 年 3 月)、在外研究で日本を留守にすることであった。ただ、幸い第 3 弾の 3 冊はまだ企画を練り始める段階にあったので、影響はそれほど大きくはなかったようである。石井氏、および出版社との間でメールを通じての構成案の相談が始まったのは帰国の 2 ヶ月前、執筆者への正式な依頼を行ったのは帰国 2 ヶ月後の 2016 年 5 月のことであった。

こうして本書の編集作業がスタートしたが、最初の難題は、中部アメリカを研究対象とする日本の地理学者が極めて少ないことであった。もちろん私には、歴史、民族、農業、経済、政治など、取り上げるテーマが決まった段階でエリアスタディーズの研究者の名前が何人も頭に浮かんだ。しかしながら本シリーズの既刊書はいずれも、ほとんどの執筆者が狭義の「地理学者」で固められていた。私と地理学界との接点は上に述べたようなものにすぎず、業界内であなたがどのような活動をなさっているのか、よく分からない。他方、石井氏は、私の大学、大学院を通じての 1 年先輩であり、長年にわたり地理学をご専門に研究をなさっているが、必ずしも中部アメリカをフィールドとする地理学者をご存じでもないようであった。執筆者を手分けして探したが、結局のところ、石井氏以外の 7 人は、私を含め、すべてエリアスタディ-

ズに足場をおく陣容となった。ご寄稿くださった方々はすべて、私にとっては日本ラテンアメリカ学会かラテン・アメリカ政経学会のいずれか、あるいは両方で顔を合わせる知己であるが、地理学の学会には所属されていないはずである(他方、石井氏は地理学関係のいくつかの学会に所属し、エリアスタディーズの学会には所属していない)。

地理学の学術書では地図が非常に重視され、またその他の図表類もふんだんに使用されている。また地誌学的な記述の仕方にも一定の約束事やパターンがある。そのことは私も何となくは知っていたので、石井氏が、本書がこうした性格から外れる地理学らしくない書物になってしまうのを心配されておられたのは、私にもよく理解できた。ただ、僭越な言い方になってしまおうとするなら非常に恐縮なのであるが、たとえば本書が地理学関係者の目を見て地理学らしくないものになったとしても、それは地理学者がこの地域をフィールドとした研究にあまり取り組んでいないことによるのであり、我々の責任に帰せられることではないという開き直りの気持ちも率直に言えばあった。とにかく、私としては、信頼のできる研究者仲間が執筆を快くお引き受けくださったのは、たいへんありがたいことであった。

それからもう一点、これはさらに重要なことであったが、私が考え込んでしまったのは、「中部アメリカ」という地域概念のあやふやさである。私も、P.E. ジェームズ『ラテンアメリカ 1: 中部アメリカ』(二宮書店、1979 年)や田辺裕監修『図説大百科 世界の地理 4: 中部アメリカ』(朝倉書店、2010 年)など、地理学ではカナダ・アメリカの 2 国を「北アメリカ」、南米大陸を「南アメリカ」とし、その中間地域(メキシコ・中米・カリブ)を「中部アメリカ」とする傾向

があることは何となく知っていた。それでもやはり、このシリーズでの「中部アメリカ」がどの範囲を想定しているのかについて確信が持てず、『『中部アメリカ』にはメキシコが含まれるのか、それともメキシコ以外の中米・カリブ諸国のことを指すのか』という質問のメールをお送りした経緯がある（2014年12月）。なお、本書でも記しているとおり、「中部アメリカ」という語は *Middle America* の和訳として生まれている。しかしこれに該当するスペイン語は存在しない。そもそもこの地域に暮らす人びとに「中部アメリカに暮らしている者」との自己認識があるのかも疑わしいことであり、試みに *Middle American* という語をオックスフォードの英西辞典で引いてみても、「アメリカ合衆国中西部の住民もしくは先住民」という説明しか出てこないのである。

エリアスタディーズの研究者の間では、「中部アメリカ」という地域の設定の仕方はなじみが薄いように思われ、実際に各執筆者から寄せられた最初の草稿でも予感どおり、取り上げられている地域的範囲はまちまちであった。そこで、本書が想定している地域的範囲についてお知らせだけでもしておく必要があるように思え、地域概念について論ずる石井氏による第1章の草稿を編集の途中段階でお送りした。もっとも私には、メキシコ、コスタリカ、キューバ、アンティグア・バーブダといったあまりに性格が異なる国々をそれぞれの章で網羅的に取り上げることには、テーマにもよるのだが、あまりに煩雑で焦点がぼやける危険があるようにも思えた。取り上げる地域の範囲は各執筆者にお任せし、シャープな議論が損なわれないようにするほうが、結局は地域理解に資すると思われるのである。それとともに、私にはそもそものこととして、「中部アメリカ」という地域区

分、そしてその下に「メキシコ」「中央アメリカ (Central America)」「カリブ」という下位地域区分をおく地理学で主流のやり方には大きな難があるように思っていた。たとえば *CARICOM* (カリブ共同体) という地域共同体を考えてみたい。*CARICOM* にはカリブの島嶼国とともに、南米大陸のガイアナやスリナムも含まれる。しかも同共同体の本部は、ガイアナの首都ジョージタウンにある。これらの国々の間に共通の歴史的体験と基層文化があり、それを基盤として地域固有のアイデンティティが築かれ、政治的・経済的な連帯と協力が追求されてきたのは明白な事実であろう。そう捉えるならば、「北アメリカ」「中部アメリカ」「南アメリカ」の三分法には、総体として捉えるべき環カリブ地域を大陸部と島嶼部とに引き裂く大きな問題があると言わざるを得ないのである（こうした思いがあったので、内容的な重複があるとの批判を招く可能性はあったものの、第10章であらためてこのあたりの地域認識について言及させてもらった）。

なお、私は地理学を批判したり否定したりしているわけではない。我われエリアスタディーズに取り組む者は、一般的に地域の幅広い事柄に関心を抱き、インター・ディシプリナ手法や考え方を大切に、そのうえで特定の主題にアプローチしている。それに対し地理学（地誌学）では、まず一定の境界線で区切った地域の設定があり（大陸規模の設定もあれば〇〇市といった規模の設定もある）、その内側で観察される森羅万象（地形や気候、資源や土地利用、産業、人種や民族、生活文化、政治経済にまでいたる幅広い事象）を理解し、またそれらの相互の連関を立体的に読み解こうとする。まずは地域を設定し（本書の場合は「中部アメリカ」）、その内側に観察されることの本質を捉えようとする地誌学的アプローチは、編者間や出版社の編集

担当者との対話を重ねる中でたいへん興味深いことであると気づかされ、おおいに触発された。近年、エリアスタディーズとしてのラテンアメリカ研究では、研究の蓄積が着実に進展しているが、他方で個々の研究が専門分野に従ってどんどん細分化され、良くも悪くも精緻さが求められる傾向が強いように思う。しかし本来、エリアスタディーズとは、「ラテンアメリカとはどんな地域なのか」とか、「カリブとはどんな地域なのか」とかいった素朴で根源的な問いや知的好奇心を出発点とするものなのではないか。本書の編集は、筆者個人にとっては、そんなエリアスタディーズのあり方についてあらためて振り返るきっかけともなった。地理学の研究者とエリアスタディーズの研究者との交流は、なぜか少ないのであるが、両者の協働がもっと盛んになり、相互の知的刺激があればよいように思う。以上、たいへん勝手気ままなことを書いてしまったが、そのことをお許し頂き、ご批判も仰ぎたい。

